



病児保育協議会

NEWS

全国病児保育協議会ホームページ <https://www.byoujihoiku.net/>

第121号

2024年(令和6年)10月1日

発行人：会長 杉野茂人
(みらく病児保育センター)発行：一般社団法人 全国病児保育協議会
〒860-0059 熊本県熊本市西区野中2丁目12-26
みらく病児保育センター内
電話・FAX：096-352-5837

第34回全国病児保育研究大会 in 金沢 大会特集号



第34回全国病児保育研究大会 in 金沢を開催して

第34回全国病児保育研究大会 in 金沢 会頭 横井 透

横井小児科内科医院 病児保育室こりすの里

2024年7月14日(日)15日(祝)の両日、金沢市の石川県立音楽堂を会場として第34回全国病児保育研究大会 in 金沢が開催されました。全国から1000名を超える皆様にお集まりいただきました。今回の金沢大会は、福井、富山、石川と北陸3県の病児保育室のスタッフのご協力があり、北陸大会として準備させていただきました。特にワークショップの「保護者対応」、「遊び」、「保育看護記録」、「感染予防」はそれぞれの県のスタッフが中心となり、支部研修会として何回かワークショップを試行しながら、皆で協力して準備いたしました。また、福井や富山の遠方の方は、大会前日から泊りがけで準備し朝の受付に備えました。朝早くから夜までご参加いただき、スムーズな運営にご協力いただいたスタッフの皆様にも深く感謝します。

ご存じのように、1月1日に能登地震が発生しました。この地震でスタッフの中にも自宅の損壊、ご実家の倒壊や親族がなくなる等の被害にあわれた方がいらっしゃいましたが、皆さんが協力して準備にあたってくださいました。また、7月11日には富山湾を震源とする地震がありました。大会中の地震に備えて、3月31日に会場の石川県立音楽堂で行われた地震発生時の対応シミュレーションの会にも出席して、地震が起こらないことを祈りながら当日を迎えました。暑い中での受付待ちをいかに少なくするか、複雑な会場配置をいかにわかりやすくするかを工夫して、皆様をお迎えしました。現地参加を重視して、現地参加者のみに参加証をお渡しする形とさせていただきました。会場は、もともと音楽を聴くためのホールで飲み物や食べ物の持ち込みが禁止されており、飲み物は水だけが許可されており、皆様にご不便をおかけしました。

大会のテーマを「みつめなおそう、私たちの保育看護 ～病児保育で守りたいもの～」とし、講師の先生方にはテーマに沿ったお話をして頂きました。帆足暁子先生の特別講演は現在の子育てを見直したくなるお話でした。ひらぎみつえ先生の特別講演も子育てを

改めて考えさせられる講演でした。教育講演では、太田邦雄先生の命を守るための心肺蘇生と事故を起こさない重要性をお話いただき、佐藤里美先生の子どもの笑顔を引き出す保育看護で保育看護のエッセンスをお話いただき、小坂正栄先生の自閉症への対応、中川裕康先生のけいれんへの対応と聴衆にわかりやすいご講演でした。

定員制ワークショップの「保護者対応」や「遊び」では、日ごろの保育での悩みを話し合う場となったと思います。「保育看護記録」は記録を見直す機会になりました。「感染予防」は手洗いやガウンテクニックの基本を見直す場になりました。金沢リハビリテーションアカデミーの菊澤亮先生による「ポジショニング」は子どもの姿勢を見直す機会になっています。太田邦雄先生の講義を聞いた後の「心肺蘇生実習」は乳幼児の心肺蘇生を経験する場になりました。バルーンドリーマーおざりんによる「バルーンアート教室」は和気あいあいと楽しく研修を行いました。また、定員や時間を決めないフリーのワークショップとしての「レクリエーションコーナー」では、病児保育室でも可能なニュースポーツや紙コップ等を使った工作の紹介があり、多くの人が参加していました。

各委員会セミナーも例年の如く開催されそれぞれのレベルアップにつながったことと思います。

14日の夜は懇親会が開催され260名が参加しました。金沢芸妓の素囃子の連獅子で幕を開け、会頭、会長の挨拶の後、乾杯で飲み、食べて、懇談しました。芸妓さんの踊りの後は、テーブル対抗の北陸3県クイズで盛り上がりました。上位7組で決戦ゲームの風船膨らませ競争を行い、上位3チームに北陸3県にちなんだ賞品が手渡されました。

会期中には地震や大きな事故もなく参加者の皆様には金沢と全国大会を楽しんでいただけたことと思います。ありがとうございました。

会頭講演

より良い病児保育を目指して～こりすの歩み～

演者：横井 透 (横井小児科内科医院 病児保育室こりすの里)
座長：杉野 茂人 (杉野クリニック みらく病児保育センター)

第34回全国病児保育研究大会in金沢が約半年後に迫っている本年1月1日、能登半島を中心とする大地震が発生しました。会員の皆様も大変心配されたことと思います。多くの被災者も出ているとの報道もありましたが、そのような状況のなか、横井会頭は、着実に準備を進められて、この研究大会を大成功に導いて下さいました。横井先生は平成18年1月から病児保育室「こりすの里」を開設され、現在まで安全で居心地の良い病児保育室を目指し、様々な活動を続けてこられました。本講演では横井先生が地域で小児科医として診療を続けておられる中、保護者からの熱い要望があり、病児保育を開始しようと平成17年の岡山大会にご参加されたこと、そこですでに開設されている先生方の話を聞くと経営は殆ど赤字で運営は大変であることなどを聞くも、皆さんの病児保育に対する熱意が伝わってきて、病児保育室開室の決心をしたことなどをお

話しされました。

最初の1年は行政の補助も得られなかったこと、しかし令和元年12月に金沢市病児保育連絡会を結成し、年に数回の行政との話し合いの場や研修会を続けること、保育数は徐々に増え、現在年間1400人を超えるようになったことなど、「病児保育室こりすの歩み」についてお話をいただきました。病児保育室こりすの里には現在4名の病児保育専門士が在籍しており、院内での様々な研修も行いながら、毎年全国大会での発表を続けている。これからも地域や全国の病児保育室で子どもたちが安心して過ごせる質の高い保育看護を行えるようになることを目標として活動を続けていくとの決意を述べられました。

横井先生、素晴らしい金沢大会ありがとうございました。

会長講演

アフターコロナの病児保育を考える

演者：杉野 茂人 (杉野クリニック みらく病児保育センター)
座長：大川 洋二 (大川こども&内科クリニック病児保育室うさぎのママ)

病児保育事業の事業継続に対してどのような基本的対応をとるかについて講演された。それは事業継続計画(BCP:Business Continuity Plan)の策定からはじまる。BCPにはリスクマネジメントおよびクライシスマネジメントが重要な要素として含まれる。リスクとは病児保育中での事故であり、クライシスとは感染症の爆発的拡大、災害等を言う。具体的な例として2020年以降の新型コロナウイルスのパンデミックでの対応である。この時の利用者の減少幅は前年の10%から80%にも及んでいた。パンデミックでは、協議会として対応すべきことは多いが、個々の施設でも対応すべきこともある。常に流行状況を把握して、病児保育利用者の動向を予測することは有効である。流行状況を事前に把握していれば、病児の受け入れ時の対応、部屋割り、スタッフの確保やスタッフの行動にも事前に対策をとることができる。そのために国立感染症研究所のデータの活用を忘れてはならない。現在もア

フターコロナの時代とはなっておらず、COVID-19の発症は継続している。また今後新たな病原体の出現とその大流行(パンデミック)が起こるかもしれない。さらに能登半島で起こったような甚大な地震への備えも大切である。そのためにはリスク、クライシスマネジメントを含むBCPの作成が必須である。

さらに会長としてこども家庭庁での審議会(子ども・子育て支援等分科会)出席での動向についても追加された。子育て対策は遅々として進展していない部分もあるが、確実に改善している部分もある。今回はその改定の説明は子ども家庭庁の栗原保育政策課長に譲ったが、今後も会長として病児保育事業の改善に尽くして頂きたいとの思いを持ちながら拝聴した。

会長講演とは協議会の基本的方針を明確に提示する研究大会必須のプログラムである。会長講演を聞きながら今後の病児保育事業への期待が継続した。これもBCPの一つであろう。

行政講演

保育分野の現状と取組について～病児保育の推進を中心に～

演者：栗原 正明 (こども家庭庁成育局保育政策課 課長)

座長：杉野 茂人 (杉野クリニック みるく病児保育センター/全国病児保育協議会会長)

こども家庭庁の活動の中で病児保育を含めた、子ども子育て支援の施策全般について、縦割り行政の打破、地方自治体との連携など私たち病児保育室を運営する者にとって、大変興味深い話を一つ一つ丁寧にお話しいただいた。

まず令和5年4月こども家庭庁が創設され、その役割として1. 少子化対策など、こども政策の司令塔としての総合調整。2. こどもの意見反映の仕組み、幼児期までのこどもの育ち指針、こどもの居場所、日本版DBSの創設など省庁の縦割りを打破し、新しい政策課題や隙間事案へ対応していく。3. 保健・福祉分野を中心とする様々な事業(保育、母子保健、社会的養育、こどもの貧困対策、こどもの自殺対策、虐待防止対策、障がい児対策)の実施を行っていくことである。

具体的には令和5年4月こども政策推進会議が開催

され、こども大綱の策定について総理からこども家庭審議会に諮問され、同年12月22日同会議において、こども大綱案が取りまとめられ閣議決定した。この中で今後3年間に行う集中的な取り組み「加速化プラン」が提案され、その一つとして全ての子育て家庭を対象とした保育の拡充～「こども誰でも通園制度」の創設～が挙げられた。また病児保育の安定的な運営を図る観点から、病児保育に係る保育士等の職務の特殊性を踏まえた基本分単価の引き上げ等を、2024年度から実施すると述べられた。また、当日キャンセル対応加算も決定したとのことである。その他、保育所におけるICT化推進、病児保育の広域連携についても具体的な事例をあげてご説明いただいた。

今後とも、こども家庭庁として病児保育事業に対してご理解、推進をお願いしたい。

特別講演1

子どもの育ちにおける愛着の意義とマルトリートメント

演者：帆足 暁子 (一般社団法人 親とこどもの臨床支援センター 代表理事)

座長：横井 透 (横井小児科内科医院病児保育室こりすの里)

特別講演1は、「子どもの育ちにおける愛着の意義とマルトリートメント」と題して親とこどもの臨床支援センターの帆足暁子先生にお話しいただきました。全国病児保育協議会発足当時から関わられ、元研修委員会委員長をされた先生です。

現在の日本の子どもに関する現状では、子どもの虐待が年々増加している。また引きこもりも性差なく増加の一途をたどっている。その要因が社会面や家庭環境面からも考えられるが、個人の不安になった時に、自分で安心感を作る力の弱さ、自分からSOSを発信する力の弱さ、課題に直面した時に自ら解決する力の弱さが共通している。これらの力は愛着を基盤としており、すべてのライフサイクルにおいて愛着が必要といわれている。母親が子どもを育てるときに、子どもが不安を安心に変えていく体験を保証することが必要だが、モバイル機器によって母親が子どもに注目しないことが多くなり、この体験が失われてきて、無意識な

マルトリートメントの育児と考えられる。これは虐待とは言い切れないが、大人から子どもへの避けたい関わりと考えられる。これにより現代の育児は子どもの生活の世話はできていても、安定した愛着関係の構築ができなくなることになる。このような子どもも特定の大人と継続的な安定した愛着関係ができれば問題が修復される。子どもに携わる大人が愛着の意義を理解し子どもとの愛着関係を構築することに尽力し、子どもの生きる力を育むことができれば日本は幸せな社会になる。育児と愛着について再考する時期ではないだろうか。

以上のような内容のご講演で、参加者の皆様からも、愛着の重要性が分かった。保育の基本を考え直すことができた。スマホとの付き合い方を保護者に話すことができそう。とても良いお話だった。という声がきかれました。

特別講演2

子どもみたいな大人、大人みたいな子ども

演者：ひらぎみつえ (絵本作家)

座長：田邊 圭子 (北陸学院大学教育学部 教授)

「絵本作家はすごく楽しい仕事」とおっしゃるひらぎ先生のご講演は、先生の「ワクワク」と「楽しい」で満たされ、1時間の講演時間がとても短く感じられた。

子ども達は、園庭の葉っぱの匂いを次から次へ、くんくんと嗅いで葉っぱのにおいの違いを発見したり、少し白目がちの上目遣いで声を出すと、すごくいい声が出る事等、どんな些細なことも「発見」に変え、ワクワクしている。このように毎日心をいっぱい動かして、「思いの外よく考え、大人顔負けの深いことを考えている」子ども達に対する尊敬を、ひらぎ先生は絵本作家になって以来ずっと変わらず大切に持ち続けていらっしゃる。

ご講演では、このような子ども達やお嬢さんとのエピソード、エピソードを通したひらぎ先生の子どもの観、絵本作家としての日常等が語られた。また、ひらぎ先生の仕掛け絵本や絵本が書画カメラでスクリーンに映し出さ

れ、先生がページをめくりながら紹介して下さる絵本の仕掛けや、読んで下さる絵本の世界を会場の皆が味わった。先生が撮影された、幼かった頃のお嬢さんがひとしきり遊んだ後の人形やぬいぐるみの写真の数々、「あそびのあしあーと」も紹介され、ひらぎ先生と私達の子どもの見る際の観点や眼差しの違いを痛感した。

絵本のアイデアは、いつもワクワクして楽しんでいないと出てこないため、「子ども達を見習って、子どもみたいな大人になりたいと思った」とおっしゃるひらぎ先生の「ワクワク」や「楽しい」が、先生のお話とスクリーンに映し出される先生の絵本や作品の世界の中で何度も繰り返されるうちに、聴いている私達の体の中にすーっと入ってきて、満たされた。私達子どもと関わる者が忘れてはいけない大切な事を、ひらぎ先生のお話を通して考えると同時に、からだ全体で感じさせていただいた特別講演であった。

教育講演1

病児保育現場における急変対応
～いざというときのための準備と予防～

演者：太田 邦雄 (金沢大学医薬保健研究域医学系医学教育学 教授)

座長：横井 透 (横井小児科内科医院病児保育室こりすの里)

「病児保育現場における急変対応～いざというときのための準備と予防～」と題して、金沢大学医学教育学教授であり、日本小児科学会のJPLSコース委員会前委員長、またJRC (日本版) 救急蘇生ガイドライン2020小児分野共同座長等を歴任され、小児の救急蘇生については日本のリーダーとなっている太田邦雄先生にご講演をいただき、以下の点についてお話しされました。

病児保育で子どもが突然倒れて意識と体動がなく心停止が疑われた時には、院外心停止の場合の対応に準じて、119番通報とともに子どもでも大人と同じように心肺蘇生を開始し、心肺蘇生アルゴリズムを行っていくことが重要です。心マッサージは強く (胸の厚さの約3分の1) 早く (1分間に100~120回) 絶え間なく行い、可能であれば気道確保と人工呼吸を行うことが大切です。AEDの作用機序と使い方について説明があり、AEDパッドの小児用の使用対象は未就学児であり、小学生の

場合は成人用AEDパッドを使用することが示されました。乳幼児の呼吸が原因の心停止の転帰は不良であり予防が大切で、特に低年齢では気管支異物の事故が絶えません。乳幼児の保育環境下では一定サイズ以下のおもちゃをなくし、給食やおやつとして提供される食物も食形態等の再検討が必要です。窒息した場合の異物除去の処置を手順に沿って行うことが必要です。低血圧になると治療できなくなるので、頻回のバイタルチェックでショックになる前の対応が非常に重要であるとのことです。以上を踏まえて職員全員でのシミュレーションが必要と強調されました。

以上のように、病児保育室での救急対応と事故予防についてわかりやすくお話しいただきました。参加された皆様が各施設の環境を見直して窒息予防がきちんと行われ、シミュレーションを行って急変時の対応への準備ができることを期待しています。

教育講演2

子どもの笑顔を引き出す保育看護

演者：佐藤 里美 (さとう小児科医院 病児保育室バンビーノ)

座長：小倉 秀美 (嶋田医院 子どもデイケア暖家)

国内で新型コロナウイルス感染症を認めて以来、3年余り経過した昨年5月より5類感染症に移行し、長期間のマスク生活も徐々に緩和されてきました。コロナ禍では、どの施設も厳重な感染症対策の下、マスクやフェースシールドで顔を覆い、お互いがどんな顔をしているのかわからないまま病児保育を行ってきたことと思いますが、ようやくお互いの表情を確かめ合い、本来の病児保育に戻りつつある今日この頃と想像しています。

今回の教育講演2では、さとう小児科医院『病児保育室バンビーノ』の室長で看護師長の佐藤里美先生に、「子どもの笑顔を引き出す保育看護」と題して、様々な不安を抱えて病児保育を利用する子どもたちの表情を受け止め、ひとりひとりに寄り添った保育看護の術をご講演いただきました。

本来病児保育は病気の子供を預かるというその特殊性から、利用する子どもたちは様々な無理を強いられ

ストレスを感じながら1日の大半を保育室で過ごします。病児保育の現場でよく見られる病気の整理、「ちょっと気になる子ども」についても子ども自身が抱える問題を保育士や看護師がそれぞれの専門性を活かして理解し、お互いの技術を高め合い柔軟に対応することの大切さを佐藤先生のご経験を交えてお話ししていただき、日常の保育看護に新たな気づきをもたらしたことでしょう。

今回の大会は「原点に戻り、基本を大切にすること」をコンセプトに様々な講演がありました。佐藤先生のご講演の中にも日々の病児保育に対するヒントが沢山あり、病児保育に携わる全ての職種に新たな「気づき」があったことと思います。子どもたちにとって病気で辛い時だからこそ「保育者の笑顔」が何よりも大切であり、利用児のみならず保護者からも笑顔も引き出せるように、両者への支援が今後より一層大切になると思いました。

教育講演3

発達障害(症)を疑う子どもの評価と対応

演者：小坂 正栄 (認定NPO日本ポーターズ協会 スーパーバイサー)

座長：森田 勝美 (富山市病児保育室)

小坂正栄氏は1997年日本ポーターズ協会総会の講演で流れていた動画の中の自閉症の子ども達が笑顔で優雅に過ごし、自閉症の子どもらにやわらかい接し方で叱ったり、怒ったり、走ったりしないで「フレアスカートで保育できるってどういうこと？」と感じられたことなどをきっかけに2000年代に入り多くの賛同者と共に、いしかわTEACCHプログラム研究会を設立され自閉症の家族を含むお仲間とともに現在も活動されています。

今回の講演では、自閉症と定型発達との脳の違い、アセスメントの方法、事例を通した具体的な関わりの実例、病児保育室での具体的提案と盛りだくさんの内容についてとても分かり易く講演してくださいました。

自閉症を理解するという事は「人を理解すること」。小坂先生の講演の中のエピソードに子どものバリ

アフリーの姿の話がありましたが、大人は診断名とか特性に着眼してしまい“個”をみる、“その子”をみることを忘れてしまいがちですが、その子その子を個々にアセスメントし、その子が持っている特性がいかか悪いか、診断名でなく、その子が生活していくにあたって、病児病後児保育室の中で困りごとに気づき、そして困りごとのないように、少ないように、不利益のないように、ご提案いただいた病児・病後児保育利用の際の事前申し込みアセスメント情報追加項目も参考に各病児・病後児保育にあった対応で、病児保育に携わるスタッフ・家族で地域の通常保育との連携を深めていくことにも繋いでサポートしていくことができれば良いと感じました。講演後、多くの参加者の方が小坂先生の周りに集まり個別相談されている姿が印象的でした。

教育講演4

病児保育中に遭遇するけいれんとその対応

演者：中川 裕康 (浅ノ川総合病院 小児科副部長/てんかんセンター副センター長)
座長：横井 彩乃 (横井小児科内科医院 病児保育室こりすの里)

「病児保育中に遭遇するけいれんとその対応」と題して、小児科専門医、小児神経専門医、てんかん専門医・指導医で、北陸の小児神経の中心的な役割を担っている、浅ノ川総合病院の中川裕康先生にご講演をいただきました。

けいれん発作と呼ばれるものには、自分の意志とは関係なく勝手に筋肉が動いてしまうけいれんと、目を開けていても呼びかけに答えないといった症状がでるけいれんのない発作があり、さまざまな病気でけいれん発作は引き起こされるということを、先生が発作の様子を演じた動画を交えて示されました。熱性けいれん(発作)、髄膜炎、てんかんなど、けいれん発作を引き起こす病気とはどのようなものなのか、けいれん発作を引き起こすまでの経過をイメージしやすいような症例を挙げて説明されました。けいれん発作が起きたときには、まずは落ち

着いて行動し、周囲に危険があれば取り除いて安全確保を行います。けいれんの様子を観察し、発作前、発作中、投薬など発作中に行った対応、発作後の様子などを記録しておくことは、けいれんの原因診断の助けとなります。抗けいれん薬の薬物投与を医師から指示される場合は、その効果と副作用を十分理解し、呼吸、脈、意識状態をしっかり経過観察して、保護者や医療機関へ引き継げるようにしたいです。

けいれん発作は何となく怖いという印象があるかもしれませんが、今まで経験したことがない人でも、けいれんとはどのようなものなのか、そしてどのように対応していけばよいのかが、わかりやすくイメージできるお話でした。これを機会に、それぞれの保育室でのけいれん対応を改めて見直すきっかけになったと思います。

シンポジウム

病児保育への思い

座長：横井 透 (横井小児科内科医院 病児保育室こりすの里)

- 「安全で持続可能な病児保育をめざして」
演者 横井 透(横井小児科内科医院 病児保育室こりすの里)
- 「病児保育事業における行政の役割」
演者 金沢市こども未来局保育幼稚園課
- 「病児保育への思い ～保護者の立場から～」
演者 前田 顕子(金沢大学小児科)

「病児保育への思い」を主題とするシンポジウムを行いました。ねらいは参加者全員で病児保育の必要性を共有し、病児保育室として安全で持続可能な病児保育を目指していくことです。病児保育室施設の立場から横井小児科内科医院病児保育室「こりすの里」の横井透、行政の立場から金沢市こども未来局保育幼稚園課施設係長の野村卓弘様、利用者の立場から金沢大学小児科の前田顕子先生の3名が発表を行いました。施設の立場からは、補助を得られなかった病児保育室の立ち上げ時の体験があり、病児保育を行ううちに考え方が保護者の勤労支援から子どもの発達支援に変わってきたこと、子どもの安全と発達を保障して保育する一方、そのためには行政からの援助が欠かせず、そのために行政に現場を知っていた

だくことが重要であることを強調しました。行政の立場からは、金沢市の紹介に始まり、金沢市の病児保育の概況の紹介があり、病児保育室との連携で情報の共有や課題の認識を行って、人数加算を50名単位とし、研修費も国の基準に上乘せして病児保育への補助を推進してきた実績を示していただきました。最後に保護者の立場から、子育ての中で子どもが病気になった時に、仕事のために病気の子どもを病児保育室に預けることへの後ろめたさがあることや、仕事の予定を考えながら病児保育に預けることができるかという不安を抱えながら病児保育を利用してきたこと、子どもたちが病児保育室を気に入っていることなどの体験をお話いただきました。このシンポジウムで病児保育室の必要性を再認識することができ、特に利用者からのお話があったことで、同じような体験をしたという共感をお話しされる参加者やこれから新しく病児保育室を行っていくうえで励みになったとの感想を聞くことができました。

安全で持続可能な病児保育室を維持していくには行政の協力が不可欠であり、連携を取っていくことが必要であることを再確認いたしました。

モーニングセミナー

What can Japanese and U.S. educators learn from each other?
日本とアメリカの保育と教育からお互いが学べること

演者：Catherine C. Lewis (Distinguished Research Scientist, Mills College School of Education / President, World Association of Lesson Studies)

座長：横井 透 (横井小児科内科医院病児保育室こりすの里)

ミルズ大学上級研究員で、日米の教育現場の調査・研究を40年間に渡って継続し、世界各国の初等教育の比較を専門とされるCatherine C. Lewis先生にモーニングセミナーとして、30分のご講演をして頂きました。

病気の子供のケアの方法は、世界中で大きく異なり、ノルウェーでは親が子供の世話をする権利があり、有給休暇が認められています。一方米国では、病気の子供を世話してもらうのに、高い時給を支払わなければなりません。保育士の給料も安く、保育所の数が全く不足しているところもかなりあります。保育という分野では、病児保育を含めて、日本では世界のトップレベルのシステムを持っています。日本では子育てが親の個人的責任だけでなく、公的責任であると行政が考えていることの現れだと考えられます。また、日本の教育は学問的発達と社会的感情的発達の両方を同時に育み、日本の教育が単に勉強を教えるだけでなく、学校への帰属意識を高め、問題解決学習などで学力を高める方法を取ってお

り、いろいろな国がこの方法を見習おうとしています。教師の質を上げるという観点からでは、就学前および小学校の両方で、教育者主導の効果的な研究システムの「授業研究」と「保育研究」があり、世界の35か国以上でこのシステムを採用しています。一方、日本が米国から学ぶ点があるとすれば、米国では子どもが自分の健康を保つ主体的な力を育む方法として、小児科医師と子どもとのコミュニケーションを改善させるプログラムが行われています。この方法を用いれば、病児保育現場でも子どもたちが自身の健康に関して積極的に果たす役割に影響を与えることができることを示唆頂きました。

以上のような内容で、今まで他国の保育事情がよくわからない状態でしたが、日本が世界に誇るべき保育を行っていることを教えていただきました。参加者全員が、自信をもって保育を行っていることを再認識したご講演となりました。

ポスター発表1

P-1～P-13では、保育内容についてや、病児保育の周知・広報に関する取り組み、保育中の緊急時対応などについて発表された。

P-1 病児保育室での製作について、保護者にアンケートを実施した。製作を行うことを知らない保護者が約半数いたが、今回を機に知ってもらうことができた。また、作品は子どもたちの一日の様子を伝えるツールにもなる。

P-2 前回大会でのワークショップで受講したアニメーションについて、実際に病児保育で取り入れた。予想以上に子どもが楽しみ、絵本に親しむことができた。病状にあわせて遊びと安静を両立できた。

P-3 発表施設では既製品の食事を提供しているが、胃腸炎の回復促進目的と保護者の負担軽減のため、うどん食・イオン飲料を導入した。胃腸炎回復期の児にとって利用しやすいと考えられ、胃腸炎以外の児にも選ばれた。

P-4 4年前にけいれん時の対応マニュアルを作成し、令和5年12月までの3年間に7例の熱性けいれんを経験した。携帯酸素ボンベの使用方法、外来への連絡方法な

座長：三上 真理子 (城北病院 病児保育室はっぴ〜)

ど、毎回振り返りを行いマニュアルの改定を行った。

P-5 コーナー保育を取り入れた。集中して遊ぶ児が増え、安静に過ごしたい児もパーティションで区切った空間で落ち着ける場所ができた。職員間での意見交換の機会も増えた。

P-6 利用時に安心グッズを持参してもらうが、その役割を調査した。利用人数3155人中319人が持参した。ぬいぐるみ・タオル・ブランケットが多かった。安心グッズは、初めてや慣れない環境において心の拠り所となる。

P-7 発表施設は企業主導型保育園に併設された病児・病後児保育で、長時間開所や多い定員数、手ぶら登園などの特徴がある。看護・保育の専門家による安全で安心な病児・病後児保育が地域貢献になっていると実感している。

P-8 地域の保育所等への情報提供(自治体からの病児対応型病児保育事業委託料分)として年4回、広報誌「Hinamico便り」を発行している。病児保育の広報と医療情報啓蒙を目的とし、わかりやすいという評価が多かった。

P-9 葛飾病児病後児保育協議会として、保育施設や近隣の医療機関に周知活動を行った。病児・病後児保育の違いや隔離について確認でき、認知度を深め利用方法を知ってもらうことができた。

P-10 鼻かみ練習キット『鼻かみトレーニングうさじろう』を用い、2022年度より認可教育保育施設3歳児に鼻かみ指導を実施、キットで82.2%の園児が成功、86.4%の保護者が役に立ったと回答し、より早期の指導を希望する意見もあった。

P-11 保護者から服薬の相談や飲みにくい薬があると聞き、鎮咳薬・抗生剤など6種類の薬に食材を混ぜ味見した。服みづらいものもあり、この体験は利用児の気持ちに寄り添える保育看護に繋がった。

P-12 病児保育の情報を得る方法を検討し、ネット検索者が約30%を占めた。2023年10月より二次元バーコードを用いた登録カードを作成し配布開始した。必要な情報が得られる利点があり効果が大いと思われる。

P-13 利用料金を現金で支払い時、ダブルチェックの必要や待ち時間が発生した。2023年1月よりキャッシュレス決済を導入した。2024年2月には利用が34.4%と増加し利便性が向上するとの回答が多く、施設側の業務負担軽減の効果もあった。

各施設でさまざまな取り組みをされていて、フロアからの質疑応答もあり理解が深まった。多くの先生方にお集まりいただき、ありがとうございました。

ポスター発表2

座長：小倉 秀美 (嶋田医院 子どもデイケア暖家)

国内で新型コロナウイルス感染症を認めて以来4年近くに及ぶコロナ禍で、私たちは感染症の脅威に日々不安を感じながら病児保育を行ってきました。利用児の大幅な減少、当日の利用キャンセル、職員の新型コロナウイルス感染等、先の見えない状況の中で今までに経験のない厳しく困難な運営を強いられた施設も少なくないと思います。

大会2日目に行われたポスターセッションでは10施設より、児童票を活用して得られた情報から子どもの特性や興味・関心の把握のみならず保護者が抱える育児負担の軽減のための保護者支援、看護師の持つ専門性を活かした家庭療養支援の必要性とその意義、病児保育室で実際に行われている感染予防対策、隔離を必要とする病児の受け入れの工夫、新型コロナウイルス感染症の流行が病児保育の利用に与えた影響の解析、PCR検査機器を用いた感染症の診断とその分析から5類移行後に認めた感染症の大流行の考察、病児保育予約システム導入後の分析より保護者不

安に対する病児保育室の役割や当日キャンセル対応加算について等、保育看護や感染症の分析と感染予防対策、施設運営に関わる発表が行われました。

新型コロナウイルス感染症の5類移行に伴い、新型コロナウイルス感染症を含む病児の受け入れを行う施設が増えてきている昨今、子どもへの二次感染や保育者への感染予防とその対策は必須であり、安全で安心できる保育看護のための正確な情報共有と更なる感染対策が重要となります。昨年4月以降は各地で感染症の大流行を認めたことは記憶に新しく、感染症をより詳細に分析した発表は多くの先生方から熱心な意見交換があり、子どもを取り巻く感染症への関心の高さを痛感いたしました。

今後も更なる各施設の取り組みが利用児とその家族への切れ目ない支援となり、安全で安心できるアフターコロナの病児保育となるように、ここで得た学びを継続し各施設の保育看護に役立てていただければ幸いです。

一般演題 口演 01~03

座長：山田 優子 (健生クリニック病児保育室ほっとルーム)

0-1では、埼玉県吉川市での研修会再開の経緯が発表されました。病児保育を利用後、保育園の受け入れ基準があり回復後の許可がおりても登園できない事案の経験をきっかけに、市内の保育園看護師と病児保育室とが事例報告や情報交換をおこなう研修会の再開を、市に働きかけ開催できたことにより、これからの課題を明らかにした、ということでした。地域により、いろいろ状況や課題は違うと思いますが、双方の関係の良さは、とても大切なことだと思われました。

0-2では短期利用の多い病児保育では、状況に応じた適切な遊びの提供がとても大切になってくる、との認識のもと、1年ごとの「看護」と「保育」の課題別取り組みを、全保育者で検討している、というものでした。その結果保育者同士の意見交換が進み「自分の不得意分野に気づき、保育の幅を広げられている」などの声が聞かれているそうです。とても大切な試みだと思いました。

0-3では、事業所で発生した4歳児の食物アレルギーの事故(小麦によるアナフィラキシー)の経験をもと

に、その対応と対策を見直した、というものでした。食事メニューをスタッフの聞き取りではなく、直接保護者に記入してもらう、とか、あらゆる場面でダブルチェックをする、などいろいろ工夫されていました。フロアからは、「発表したことがだいじ(かくすことが多いのに)」「やるべきことを増やすととても大変だから、よ

り単純化した方法を考えたほうが良い」などの意見がでました。私自身は、同じ石川県の施設なのに、ほとんどその事業所の存在をしらなかつたことに愕然としました。今後、小児科併設ではないいろいろな多機能の事業所が増えることを頭に置き、交流の場をもたなくては行けないとおもいました。

一般演題 口演 04~06

座長：佐藤 勇(よいこの小児科さとう 病児保育室よいこのもり)

応募演題の中から、実行委員会で厳選された一般演題のセッションで、6題中後半3題を担当しました。

O-4:COVID-19病児の受入状況

病児保育室うさぎのママ 中山明日香さん

5類移行後のホットな話題として、病児保育室でCOVID-19患児をどのように扱うかは、重要なテーマです。発表施設は2023年5月から、保育士がPPE装着のうえ22名のCOVID-19患児を受入れ保育を行いました。受入については、施設職員同士での話し合い決めたそうです。発表の前日、施設長会議でも話題となっていたテーマでもあり、活発な質疑が行われました。

O-5:病児保育利用児に占める障害児の割合

～山梨県内の病児保育実践から～

病児保育室ドリーム 宮本知子さん

通常保育では障害児の受入に加算が行われるが、病児保育事業は対象外となっています。しかし病児保育では、慣れない環境で預かるため通常の保育以上にストレスがかかり、より手厚い保育を行わなくてはなりません。そのため、その実態把握の基礎資料とするために、

山梨県支部8施設での実態調査を行いました。その結果、疑い例をふくめて利用児の9.8%が障害特性を持つ児であることが示されました。公的な発表でも、就学児の8.8%に発達障害をみとめており、今回の調査と一致し、現場での実感とも一致するのではないのでしょうか。山梨県は子どもの心サポートプラザなどを中心に発達障害児医療療育に先進的な取組をしている地域でもあり、是非、検討を進めていただきたいと感じました。

O-6:病後児室における発達専門医受診の決断を支えた保育看護～家族のレジリエンスを信じて～

病後児室ミルク 初貝美佐さん

発達に特性を感じる病後児保育室利用児にたいし、看護師・保育士と協働で、既存の評価法を用いたアセスメントを行い、家族の専門医受診をサポートするという、病児保育室ならではの支援を行った実践報告でした。前題と同様に、病児保育室で増えつつある発達障害児に対して、保育看護が行える病児保育室ならではの取組の報告でした。

ワークショップ1

ポジショニング「子どもにとって良い姿勢」

演者：菊澤 亮(金沢リハビリテーションアカデミー 作業療法学科)
座長：森田 勝美(富山市病児保育室)

このWSは、日頃病児・病後児保育を利用する子どもたちへの援助として、良かれと思って行っている援助も方法によっては安楽ではなく、訴えることができないだけで苦痛な場合もあるかもしれない、悪影響になることもある?!のでは…また、科学的根拠に基づいた知識を持ち、姿勢管理の重要性をきちんと理解したうえで利用する子どもたちに還元・実施することでより効果的な安楽な肢位を保つことができる、今まで取り上げられることが少なかったテーマだが日常の保育看護の現場で欠か

せない内容であり、菊澤先生にお願いし実現しました。定員30名でしたが当日参加の要望が多く、少しでも多くの方に参加いただき日常の保育看護現場で活用、そして保護者に伝達し家庭看護へ繋いでほしいという思いを講師にもご理解いただき36名の参加で実施しました。

WSの目標を①良い姿勢を知る②食事と呼吸への影響を知る③体位ごとの体への影響を知る④姿勢管理の方法を知るとし、そもそも良い姿勢とは何か、基準はあるのか?良い姿勢をとることで得られる効果は何?姿勢によ

る食事と呼吸への影響、仰臥位・側臥位・腹臥位・座位それぞれ各体位のメリット・デメリットなどについて学びを深めました。

参加者自身が、①異なる首の傾斜肢位（顎を軽く引いて、首を後屈、首を思いっきり前屈）で水分を1口飲んでみる、②呼吸の仕組みと姿勢との関係を知るため姿勢を変えて（体をまっすぐ起こして、体を丸めて、体を反らせて）深呼吸してみることで姿勢による呼吸への影響

を感じる③タオルの使い方（おりたたんで、丸めて）を学び、人形や参加者同士でタオルを用いて仰臥位の楽な姿勢・側臥位で反らない姿勢・腹臥位で楽な姿勢を保持してみるなど幾つかの体験も含まれた内容で、全国から集まった参加者が和気藹藹と実習されている姿は大変有意義なWSであることを反映している光景でした。

全ては、発達も体格も状況も異なる子ども一人ひとりの為に。

ワークショップ2

C P R(心肺蘇生)「C P Rハンズオン」

演者：太田 邦雄（金沢大学医薬保健研究域医学系医学教育学 教授）
座長：横井 彩乃（横井小児科内科医院 病児保育室こりすの里）

教育講演1「病児保育現場における急変対応」に引き続いて、心肺蘇生のハンズオンセッションを金沢大学医学教育学教授の太田邦雄先生を講師に迎えて行いました。

6人ずつ4班に分かれ、学童と乳児の2種類のマネキンを用いて心肺蘇生を行いました。110回/分のメトロノームに合わせて実際に心臓マッサージをしてみると、絶え間なく一定のリズムで続けることの大変さを実感しました。また、つつい押しすることに集中しがちですが、しっかりと圧迫を解除して胸の高さを元に戻すことで、心臓に血液が戻ってくるのを促すことも大事で、基本を身に付けたうえでしっかりと有効な手技を行うことが必要であると教えていただきました。次に2種類のAEDを使用し、未就学児用パッド/モードとはどのようなものかを体験しました。機械の種類によって小さな違いは

ありますが、しっかりとアナウンスを聞いてその通りに手技を行っていけばうまくできると実感できました。さらに、異物に見立てたスポンジ片をマネキンの口に入れ、背部叩打法と胸部突き上げ法を行いました。やみくもに叩くだけではなかなかうまくいかないのですが、2種類の方法を使いながら頭部を下に向けて重力を使うことで、異物除去をすることができることを体感できました。最後に、アンビューバックを用いた人工呼吸と心臓マッサージを二人法で行い、協力して心肺蘇生を行うことの難しさと大切さを実感できました。

今回の実習をもとに、各施設での急変時の対応と事故予防を再確認し、繰り返し訓練を行って、いざという時でも有効な処置を行うことができるよう、スキルを高めていただきたいと思います。

ワークショップ3

保護者との関わり 「失敗談から学ぶ～保育者の気持ち・保護者の気持ち～」

報告者：森 忍（高重記念クリニック病児・病後児保育室 ラグーン）

今年の全国病児保育大会のテーマは、みつめなおそう私たちの保育看護～病児保育で守りたいもの～でした。

病児保育を始めた時の事が思い出され、十数年たっても心に残っている保護者との気持ちの行き違いで辛かった気持ちを思い出しました。病児保育に関わっていれば必ず起こりえる事そして、現場で働いている保育士さんや看護師さんも、一度は経験したのではないかと思います、今後の保育に活かすことが出来ればと、このテーマでW

Sを行うことを決めました。参加者の方が事例から想像し考え発表された事は、どれも真剣に取り組んでいるからこそ見えてくる答えでした。聞こえきたのは、各テーブルで話し合う積極的な意見や発言そしてその様子が何だかうれしくてちょっと感動してしまいました。

参加された方はベテランの方、病児保育に携わって日が浅い方など様々ですが、病児保育では子供の症状・家庭の状況・親の精神状態・職場環境等がありマニュアル

では、決して対応できない事が多く存在し対応しなければならぬのは皆同じです。

保護者にとって大切な子どもが病気になった時、心配や不安また仕事を持っていけば休めない、保育園に行けない、病院はだれが連れていくの？病気の子供をどうしたらよいの？そしてそんな不安な気持ちを、病児保育室へ預ける事で解消され安心に変わったはずなのにスタッフの一言で、相手に誤解を与え怒りに変えてしまった。

子育て支援どころか、まったく自分のことを理解して

くれない人や場所になってしまったらそれはとても悲しい事です。保護者もスタッフも子供が元気になって、日常生活に帰っていく思いは同じなのですから。

これからも子供たちの健やかな成長を願いながら、WSでの学びを日々の保育看護に活かしていただきたいと思えます。

最後に本大会の実施につきましてご支援、ご協力くださいました皆様に心より感謝いたします。

ワークショップ4

病児病後児保育の記録 「病児病後児保育の記録～そもそも記録って何のため？～」

報告者：森田 勝美 (富山市病児保育室)

病児病後児保育における記録、それは家庭看護にも繋がる日常業務の中できっても切り離せない重要なものです。各施設で色々と思考錯誤を繰り返し、より良い記録のあり方を検討されてきています。病院併設型・保育園併設型・単独型・その他など施設タイプ別によっても、お預りする年齢によっても、病児対応・病後児対応など事業類系によっても異なるかもしれません。病児保育はチーム医療であり、携わる職種は多彩で多くの職種が関与しています。記録を記入する職員がどの職種なのかによっても趣きが変わるかもしれません。今回WS参加者には、施設長から許可を得た実際に記入済みの記録用紙を個人名は伏せ持参のうえ参加していただきました。(WS後に会場で回収し大会側で処分済)

まずは、各自の記録について「誰が記入」し「記入した記録はいつ誰に渡しているか」「記録記載の際に大切にしていることは何か」について話しをしていたら、その後に保育看護記録に関するミニミニ講座を

実施しました。ミニミニ講座では「記録」に関して病児病後児保育の記録に多く携わっていると思われる「保育」の視点からと「看護」の視点から今一度「記録」について振り返り、保育記録・看護記録共に学生時代に学んできた原点に戻り、記録の目的、大切にすべきことをみつめなおしました。その後に再度、保育看護記録は「誰のもの？」「誰のための記録？」「どうあるべき？」「記載時に注意すべきことは？」についてグループ内でディスカッションの後に発表していただきWSを終えました。

活発な意見交換が行われ、参加者の皆様が日々記録をどのように改善すれば保護者や自分たちに役立ち次に繋げられるかを考え、このWSに参加されていることを実感することのできるWSでした。皆さん思いは一つであること、記録は子どものため・保護者のため・そして関わる関係者みんなのためのもの。またひとつ大切なもの・ことに気が付くことができました。

ワークショップ5

バルーンアート「初歩のバルーンアート教室」

演者：おざりん (バルーンドリーマー)

座長：寺分 彩子 (横井小児科内科医院 病児保育室こりすの里)

ワークショップ5では、講師のおざりんさんの紹介後に、バルーンショーが始まりました。音楽に合わせて

て風船が飛び出したり、どンドン形ができあがっていく様子に緊張していた参加者全員が目を奪われ、少し

ずつ笑顔がこぼれ、会場全体が温かい雰囲気になりました。

参加者に「バルーンアートに初めて挑戦する人？」と聞いてみると、30人中25人ほどが初めてとのことでした。さっそく、風船に空気を入れてみますが…空気が入らず苦戦する人、空気を入れることができても風船が割れるのではないかと不安がる人がほとんどでした。和やかだった雰囲気がまた不安や緊張の顔でいっぱいになりました。会場内で誰かの風船がパン！と割れた時のことです。すかさず「たーまやー！花火の季節だね。」とおざりんさん。さっきまでの緊張の空気が吹き飛んで、一気に会場が和むのを感じました。大きな音=怖いではなく、大きな音=楽しむ。この感覚が安心感をもたらせるスキルの1つなのでしょう。参加者は、時間がたつにつれ、空気を入れること、風船をひねることに抵抗がなくなってきた、夢中になって

作っていました。中には、風船を手で引きちぎる技をマスターする人も出てくるほどでした。

犬や飛び出すネズミ、剣、お花のプレスレットなど、基本の形が何個かできるようになった頃に、2回目のバルーンショーが始まりました。第1会場の講演が終わった頃のショーだったこともあり、参加者だけではなく、ギャラリーも手拍子をして楽しんでいました。参加者の中には、1回目のショーの時には見られなかった、自分の力で作りたいという意欲が表情に満ち溢れている人も多く見られました。

最後は、全員で写真撮影をして終了となりました。参加者の皆さんの表情が豊かになっていくのが印象的で充実したワークショップとなりました。この楽しい気持ちを胸に、各施設でもバルーンアートを楽しんでいただけたらいいと思います。

ワークショップ6

感染予防「感染予防実習～手洗いチェックと手袋・プラスチックエプロンの着脱～」

報告者：菱沼 真紀 (横井小児科内科医院 病児保育室こりすの里)

病児保育室では食事や排泄の介助、遊びなど様々な場面で子ども達の生活に関わります。その一場面一場面です。ウイルスや細菌の運び屋になっていませんか。今回のワークショップでは、感染対策で重要な手洗いのチェックと手袋・プラスチックエプロンの着脱実習を行い、感染防御の正しい知識と技術を身につける事を目標としました。感染についての基本的知識のおさらいを講義形式で行い、続いて2グループに分かれて実技実習を前半・後半に分かれて交替し、30分ずつ行いました。

手洗い実習では、ATP測定器(微生物や生物に由来する汚れに含まれるアデノシン三リン酸を検出する事により迅速かつ高感度に汚れを検出し数値化する)を使用し、手洗い前と手洗い後の汚れを測定し前後の数値を比較しました。

手袋・エプロンの着脱実習では、着ける順番を意識しながら身につけ、ブラックライトで発光する塗料を手袋とエプロンに塗布しました。その後、順番や手順を意識して外し、汚れに見立てた塗料がどこに付着したのかを、部屋を暗くしてブラックライトで確認しました。2人ペアとなりお互い気づいた事を伝えあいました。

参加者は26名で、施設形態や病児保育経験年数も様々な方々のご参加でした。講義では、アルコール消毒では効果がない感染症がある事や、手袋やエプロン

の着脱順序にも意味がある事など勉強になったとの意見がありました。

手洗い実習では、手洗い前の汚れの数値の大きさに驚きながらも、手洗い後には皆さん数値が低下しており、手洗いの大切さを実感されていました。着脱実習では気を付けていても汚れが思いがけない所に付着している事に驚かれ、自施設の防護具を見直したいとの意見や、実技実習を自施設の研修にも取り入れたいとの意見がありました。また、研究大会参加の醍醐味である、他施設の方との情報交換も実習を通して活発でした。今回学んだ知識や技術を各々の施設に持ち帰り活用して頂けたらと思います。



ワークショップ

病児保育室での遊びを考える 「事例を通して病児病後児保育室での遊びを見つめなおす ～遊びの背景にある子どもの姿、思い描く子どもの姿～」

報告者：山田 邦代 (加賀市医療センター 病児・病後児保育室 かもっ子)

「事例を通して、病児病後児保育での遊びを見つめなおす」ことを目的とし、提案事例をもとに意見交換を行いました。

【事例】6歳10か月女児・1歳からのリピーター・1年ぶりの入室・インフルエンザからの回復期体温36.7℃・利用5日目・以前は人形遊び、製作が好きだった。現在はYouTubeを観たり、体を動かすことが好き。(参加者には利用状況を資料にて配付)

この事例より、前日の背景や状況も含めて、入室時の姿からどのように遊びを捉え展開していくか、また、その理由について各自が考察し、参加者30名(欠席者1名)1グループ6名で意見交換し、5グループが発表をしました。

今回の事例では、以前好きな遊びと、前日の状況より人形を使ったごっこ遊びの展開や廃材を使った製作の展開の意見がありました。また、1年ぶりの入室なので発達段階に応じた好きな遊びの提供や、会話の中から女児の気持ちに寄り添い、前日の遊びに飽きていれば、ゲームやボールを使った遊びを考える意見もあ

りました。一方で、YouTubeやDVDの視聴は、施設によっては落ち着く手段として時間を決めて活用するケースと、視聴がよいか迷っているケースがあり、各施設での方針について意見交換もありました。

意見交換を終えて、病状や病態に配慮をする点が共通していました。保育所保育指針にも述べられている、子ども主体の保育を大切に考えているからこそ、病児保育という制限がかかる環境でも発達段階に応じた遊びの提供や工夫、子どもの気持ちに寄り添った保育の実施。何より1日を楽しく過ごせるように、遊びを通じて子どもの自己表現を引き出す支援をしていることも共通していました。

参加者が他施設の方と、多様な視点で遊びを考察し、実践に関する多岐にわたる意見交換が活発に行われ、その結果、様々な角度から捉えた遊びの考え方を共有する貴重な時間となりました。参加者の方に感謝申し上げますとともに、今後の保育に繋がればと願っています。

レクリエーションコーナー

「笑顔！元気！レクリエーション！」

演者：中嶋 佳奈恵 (石川県レクリエーション協会 指導員1級・理事)
座長：寺分 彩子 (横井小児科内科医院 病児保育室こりすの里)

レクリエーションコーナーは、中嶋先生の指導のもと3つのコーナーをご用意しました。

1つめ、製作コーナーは、くるくるレインボー、紙コップティラノ、ガシガシハンド、紙コップロケット製作をしました。机に手順書、材料を設置し、難しい作業だと感じる箇所には、スタッフがつきフォローをしました。中でも、くるくるレインボーは、常に満席状態で、作業工程は難しめですが、完成した時の達成感からくる笑顔がとても印象的でした。目新しい製作を喜ぶ方が多い中、製作の材料費は保育士が負担する施設や既製品のおもちゃで遊ぶので製作をほとんどしないと話す施設もあり様々でした。

2つめ、紙コップ遊びコーナーは、紙コップツリー、製作コーナーで作るガシガシハンド、紙コップロケット体験をしました。準備物は少ないのに、遊びが展開していく体験することで歓声があがる事もありました。

3つめ、ニュースポーツ体験コーナーは、ソフトスティックゲーム、バグジー、安全ソフトダーツ、どこでもピンポンを体験しました。特にソフトスティックゲームは、近年モルックが注目を浴びているので興味を持つ方が多くいました。木製のモルックと違い柔らかい素材を使っている事により、音も静かで、仮にぶつかっても痛くない点が好評でした。様々な体験をす

ることにより、購入を検討する方や、自作で似たような物を作ろうと意気込む方が見られる中、体を動かす遊びを取り入れたことがないという施設もありました。今回の体験をすることにより、各施設での遊びに対して、色々な刺激があったのではないかと感じます。

ワークショップは限られた人数でしか体験できませんが、参加自由のレクリエーションコーナーとして2日間行ったことにより、講義の合間にたちよられる方、時間の許すまで製作コーナーでとことん作る方、他の参加者さんをつれて何度も足を運んでくれる方など、たくさんの方に楽しんでもらいました。



保育園型委員会セミナー

「保育園型の保育看護を語り合おう」

報告者：森 博 (保育園型委員会 委員長 社会福祉補人 あおぞら あおぞら第2保育園)

大会テーマを受けて、「保育園型の保育看護とは」をテーマにグループディスカッションを行った。経験年数別に分かれ、日頃大切に思っている保育看護活動を中心に話していくことで自身の保育看護を見つめなおす機会であったと思う。保育園型に加えてクリニック併設の病児保育室の参加も多かったので、病児病後児の日常の保育看護を共有することができた。自らが保育看護の質を問い、更に向上させるための検討や方法、感染対策や運営に関する工夫、連携、課題や強みなどについてのディスカッションは進められた。

これまでの開催では、職種別・地域別などのグループ構成を行い、特徴に応じた内容で実施してきた。今回は経験年数別ということもあり、自身の感じる身近な体験の共有や課題の相談ができた一方で、経験者からのアドバイスが得られにくいという点もあった。全国大会は座学が多いので、「語り合う場」が必要とされていることは例年を通して感じている事でもある。

セミナーの参加者がインプットだけではなくアウトプットが出来るように計画しながら、同時に会場に他グループの話し合いの経過をアップしていった。また、セミナー後もQRコードで討論のまとめを見られるように掲載した。

セミナー総評は「10年後はどのような病児病後児保育を期待しているか」という問いかけがあり、「10年後をつくるのは、まさしくこの会場の一人ひとりである」との示唆に、改めて、地域に根ざした活動の重要性や保育者としての使命感を感じる時であった。目の前にいる子どもや保護者に寄り添いながら、共感を基に、「丁寧な保育看護」「考える保育看護」が、利用者に見える形となるよう、また、働き手の保育士や看護師の活動の一助になったことを願う。

*今回の施設紹介、アンケート集計、セミナーの様子を下記QRコードにて紹介しています。ぜひご覧ください。



施設紹介

企業主導型保育事業
コスモピア保育園
病児病後児保育室
こすもん



<https://photos.app.goo.gl/3BNHc7hC4UVmhDNG7>

♣2024年10月31日まで閲覧可能♣

アンケート集計 セミナーの様子



<https://photos.app.goo.gl/TvtYx65r8HNGqPXN6>

スペシャルインタレストセッション

働く親を支える病児保育の在り方

報告者：永野 和子 (資格認定委員会 委員長)

今年のスペシャルインタレストセッションは、「働く親を支える病児保育の在り方」と題して、認定NPO法人児童虐待防止全国ネットワーク理事子育てアドバイザー/キャリアコンサルタントの高祖常子先生をお招きして講演とフロワーワークを開催いたしました。

高祖先生は厚生労働省「体罰等によらない子育ての推進に関する検討会」構成員(2021年度)、内閣官房こども家庭庁設立準備室「就学前のこどもの育ちに係る基本的な指針に関する有識者懇談会」委員(2022年度)としてまた、Yahoo!ニュース エキスパート コメンテーターとしてご活躍されています。

今回は、①子育ての現状②体罰禁止と子どもの権利③保護者と子どもの気持ちを考えるワーク④夫婦のコミュニケーションと選択肢と4つの展開でお話をいた

きました。

共働きが増えている現状から始まり、共働き世代の現状や、育児の主担当を通して身につくスキルなど、色々な視点から日頃病児保育を利用している家庭の現状をお話ししていただき、先生のライフワークでもあるどならない・たたかない子育てまでとても興味深いお話を拝聴しました。参加者からは、見る側面を変えて見てみると、自分たち保育する側の視点も変わると気づいた、保護者の抱えるストレスについて理解していく必要があると感じたなどの意見が聞かれ、あっという間の90分でした。日頃の病児保育という特殊な保育の中で、私たち病児保育専門士が多角的な子育て支援を学んでいく良い機会になりました。

安全対策委員会セミナー

病児保育現場の応急処置と傷害予防

報告者：保坂 泰介 (保坂小児クリニック/枚方病児保育室くろみ)

近年、保育施設における、リンゴを食べての窒息や、送迎バス内置き去りによる熱中症からの園児の死亡事故などが報道され、また事故に関わった保育職員が送検されたり、罪に問われる事例もあり、保育施設での安全管理対策が強く求められる時代となっています。そこで、今年度の安全対策委員会セミナーは、日本保育保健協議会の事故予防・安全対策委員会委員長である、高屋和志先生に「病児保育現場の応急処置と傷害予防」というタイトルでご講演いただきました。

最初に、保育園における事故の特徴を述べられました。この10年ほどで教育・保育施設における死亡事故は約1/4に減少したものの、直近の3年間では、年5件

で下げ止まっていること、園に預け始めて間もない時期に重篤な事故が起こりやすいこと、玩具や食器、市販薬などの普段使いのものにも潜在的な危険が潜んでいること、などのお話を具体例を挙げつつ説明されました。その後、現場や家庭でできる応急処置について、救命のための一次救命処置と重症化予防のための追加処置に分けて解説されました。また、近年のこどもの事故事例の集積と分析から、こどもの事故は、accident すなわち避けられない・思いがけない不慮の出来事、ととらえるのではなく、preventable injury すなわち予防可能な傷害である、との認識を持つことが大切とのご指摘がありました。

今回の高屋先生のご講演を通して、園の安全対策として、①事故予防の意識を常に持つこと、②事故が生じたときに適切な対応ができる体制を整えること、が重要であるとの認識を、会場に参加された皆さんと共有できた、有意義なセミナーとなったと感じました。

尚、今回、初めて病児保育研究大会に参加された高屋先生からは、参加前に想像していた以上に規模が大きく、また各会場とも熱気と活気に満ちており、大変感心しましたとのご感想を述べられていたことを申し添えます。



調査研究委員会セミナー

「2022年度全国病児保育協議会加盟施設の実績調査」

演者および報告者：荒井 宏治（調査研究委員会 委員長）

全国病児保育研究会加盟施設の2022年度実績調査に関するご報告を申し上げます。419施設から回答をいただき、母集団の特性として、施設形態は医療機関併設型が280施設（67%）と多く、事業類型では病児対応型241施設（56%）、病児・病後児対応型91施設（22%）で、これら合計332施設（78%）は急性期対応ができる病児対応型、事業主体は311施設（75%）が自治体で交付金受給施設でした。2022年度は新型コロナがまだ2類感染症で、社会は経済活動維持と感染拡大防止の両立を目指しており、6月末から8月にRSウイルスが、年を通してアデノウイルスや溶連菌などが流行していました。利用人数の平均は467人、利用率29%と前年度に比べて若干増加の傾向でしたが、施設間の回復のばらつきが広がっていました。その要因として施設形態別の利用率で、医療機関併設型の平均は34%に対して、医療機関併設型以外は20%と有意差がありま

した。医療機関併設型以外の施設では利用直前の診察や検査が困難であったため、コロナ禍において発熱がある子の利用が抑制されていたと考えられました。そのような中でも定員数の病児を預かる際に備えて、1人の保育士が担当する預かり児数の平均（=定員÷保育士数）は、医療機関併設型は1.5人、保育園型は2.3人、単独型は2人と計算され、手厚い保育看護ができるように配置されていました。収支は60%の施設が赤字で、収入に対する人件費の負担大きいのはこのような理由と考えられました。令和6年の交付金要綱では病児対応型の基本分が140万円ほど上がりましたが、すべての地域に行き届いていないようです。交付金の更新がされていない施設は自治体に交渉するべきと思います。最近の調査の回収率は50%程度で、これ以上低下すると協議会施設の状況を把握することが困難になります。どうか今後ともご協力をお願いします。

研修委員会セミナー

ステップアップ研修

報告者：横井 透（横井小児科内科医院 病児保育室こりすの里）

金沢大会2日目の7月15日14時から15時半まで第3会場の交流ホールにおいて研修委員会ステップアップ研修が開催されました。大会2日目の午後ということで参加申し込み人数は21名と少ない中1名欠席で、当日参加申し込みが4名あり、24名の参加者で行いました。（その内病児保育専門士は13名でした。）参加者を4～5名ずつの5グループに分け、各グループに研修委員が1名ずつファシリテーターとして付きま

した。薬の名前とその飲み方の記載や状態を示すバイタルデータの解釈記載等に詳しくない保育士さんは、症例提示の中でもわからなくなることがあるとのことで、研修のはじめに森田勝美研修委員長からミニレクチャーがあり、保育看護計画を立てるときに基本的な考え方の復習と医学用語の解説が行われました。

その後、症例検討が始まりました。今年は年齢の違う3名のインフルエンザ罹患児の同室保育についての症例が提示されました。まず、各人が提示された症

例を読み込み、それぞれの患児についての保育看護計画を考えて、グループ内で発表して共有しました。その後、同室異年齢保育の場合の保育看護計画に発展させて、各自が考えたのちグループディスカッションを行い、グループごとに発表を行いました。年齢や病態の異なる子ども達をどのように同室保育していくのかを計画することは難しかったようです。

参加者のアンケートでは、日常で遭遇する症例でいつもは何となく保育看護している子どもたちについての保育看護計画を文字に起こして丁寧に考える機会になった。また、施設形態が異なる参加者のいろいろな意見を聞いた。難しかったが勉強になったとの意見が多く見られました。

遠くから大会に参加することが難しいためオンラインステップアップ研修も歓迎する意見が多く、研修委員会ではオンラインステップアップ研修を計画していく予定です。

感染症対策委員会セミナー

病児保育から始める薬剤耐性対策

報告者：佐藤 勇 (感染症対策委員会 委員長)

今研究会では福井大学医学附属病院山田健太先生に講演いただいた。山田先生は、中堅の小児感染症研究者で、ご自身も子育て世代であることから、病児保育の現場に寄り沿ったご講演を頂いた。薬剤耐性菌の問題点について、薬剤耐性菌が増える→感染症が治りにくくなる→手術やがん治療など感染症を制御しながら行う医療が難しくなる→結果的に様々な生活が制限される、と指摘された。2019年に世界で127万人が薬剤耐性によって死亡しており、2050年には1000万人が死亡するという予測を示された。看護師は医療に直接関与するため、耐性化防止に大きな役割を果たすが、保育士も、医療と家族をつなぐ大切な役割があり、病児保育の理念である「病気の時こそ子どもたちに安心感を与える」という考えこそが、家族に影響をあたえるstewardship(保育士としての役割)であると言われた。感染管理については、実際に保育者が病児保育で行っている吐物処理などの感染防御のやり方を、家族

に伝え、うまくやれたときに家族を褒めることで習得させることができると力説された。感染リスクを避けるために、ワクチンと同時に、感染源の暴露を減らすことが重要と指摘され、標準予防策の周知徹底が重要だと説かれた。抗菌剤が「風邪に効く、ウイルスに効果がある」と思っている人は、市民も保育士も同様に15-20%程度おり、耐性菌については両者とも30%程度知っている一方で、耐性菌が感染症だけでなく、他の病気治癒にも影響があると思っているのは、市民30%程度に対して、保育士は60%程度が知っていたと述べられた。これらのことより、保育士、看護師に耐性菌の正しい知識を知ってもらうことで、保護者への情報提供を進め、抗生剤の適正使用を進めたいと述べられた。耐性菌問題は、結果が明示されることのない問題であり、ある意味、環境問題に似ていることから、人類の未来のために大切な問題と知らせてゆくことが寛容であると話された。

◆ 第34回全国病児保育研究大会 in 金沢 広報の部屋 ◆

みつめなおそう 絵本のせかい

4冊の推薦絵本のご応募を頂き、誠にありがとうございました。
皆様にお立ちよりいただき、イイね!シール「👍」の
多く集まりました絵本を紹介していただいた施設に記念品をお贈りします。

- 1「あけてびっくり しかけえほん いっせーの ばあ」
病児・病後児保育室すこやかルーム (千葉県松戸市) 22票
- 2「あーといってよあー」エンゼル宮前 (神奈川県川崎市) 17票
- 3「へんしんコンサート」病時保育室カンガルー (新潟県新潟市) 15票
- 3「カンカンカンでんしゃがくるよ」エンゼル宮前 (神奈川県川崎市) 15票
- 3「たべものやさんしりとりたいかいさいします」エンゼル宮前 (神奈川県川崎市) 15票
- 6「そらまめくんのベッド」さとう小児科医院バンビーノ (千葉県千葉市) 14票
- 7「なりきりえほん④おめん」ニコのおうち (東京都世田谷区) 12票



Photo Album



会頭講演



会長講演



次期会頭挨拶(松川武平先生)



こども家庭庁講演



特別講演 1(帆足暁子先生)



特別講演 2(ひらぎみつえ先生)



教育講演 1 (太田邦雄先生)



教育講演 2 (佐藤里美先生)



教育講演 3 (小坂正栄先生)



教育講演 4 (中川裕康先生)



シンポジウム



モーニングセミナー (Catherine C. Lewis 先生)



一般演題座長



ワークショップ 1



ワークショップ2



ワークショップ3



ワークショップ4



ワークショップ5



ワークショップ6



ワークショップ7



レクリエーション



資格認定委員会 SIS(高祖常子先生)



安全対策委員会(高屋和志先生)



調査研究委員会セミナー(荒井宏治先生)



研修委員会ステップアップ研修



感染対策委員会セミナー(山田健太先生)



予防接種(太田和秀先生)



病児保育専門士表彰式



施設長会議



病児保育連盟総会



編集後記

金沢大会に参加された方はこの特集号を読み大会当日のことを思い出し、参加できなかったセッションの内容を改めて知ることができたと思います。能登半島地震の渦中の準備はとてものたいへんであったでしょうが、素晴らしい、充実した大会を満喫させていただきました。また、オンデマンドでの配信もあり参加できなかった方々にも当日の熱気が伝わるのはもちろんですが、当日と変わらぬ学習ができることはこの上ない幸せであり有意義であると確信します。

大会実行委員の皆様、本当にありがとうございました。

広報委員会 委員長 藤本 保

協議会ニュースに関するお問い合わせ先

一般社団法人 全国病児保育協議会 広報委員会 担当：藤本 保
 〒870-0943 大分県大分市片島 83-7 大分こども病院 FAX.097-568-2970
 Email : byouji@oita-kodomo.jp